

Title	鈴鹿市の流言と外国人差別
Author	野口, 道彦
Citation	同和問題研究 : 大阪市立大学同和問題研究室紀要. 22 卷, p.63-73.
Issue Date	2000-03
ISSN	0386-0973
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学同和問題研究会

鈴鹿市の流言と外国人差別

野 口 道 彦

1. はじめに

1997年末、三重県鈴鹿市で流言騒動がもちあがった、それからほぼ1年後に市民対象のアンケート調査を行った⁽¹⁾。本報告は、それによって得られたデータをもとに、(1)なぜ鈴鹿市で発生したのか、(2)どのくらい広がったのか、(3)流言の伝搬者は誰だったのか、(4)なぜ、特定のショッピングセンターがうわさの舞台になったのか、(5)流言にはどのようなバリエーションがあったのか、(6)流言は、外国人労働者に対するどのような感情や態度を反映していたのか、(7)流言再発の可能性はあるのかなど、流言の増殖過程を明らかにするとともに、外国人労働者に対する市民の差別意識の様態を明らかにする。

2. 流言の概要

1997年11月から12月にかけて、鈴鹿市で流言が広がった、その内容は、「ショッピングセンターのトイレで小学生の女の子が、外国人数名によって強姦され、母親はショックを受けて自殺した」、「散歩中に老夫婦が外国人数人によって襲われ、夫の見ていた前で、妻が強姦された」というものである。

このようなうわさについて、警察には100件以上の問い合わせの電話があったという。事態を重く見た鈴鹿署は鎮静化のために、「駐在所速報—女性に対する暴行事案の噂話について」(1997年12月16日付)を一万枚配付・回覧した。

鈴鹿署では、真相を究明するために、関係機関、大型店舗、病院などで捜査をしましたが、この事案は把握しておりません。

いずれも、『人から聞いた』、『友達がいつていた』とのことで確かな情報も得ておりません。

また、警察には、そのような事案に対する被害の届出もありません。(中略)

鈴鹿署では、引き続き事案の解明に当たっておりますが、現在では、噂の可能性が大のように思われます。

注) この論考は、1997年度～99年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書『外国人就労者の人権問題に関する社会学的研究』(研究代表者 鐘ヶ江晴彦、2000年3月、課題番号09410049)に発表したものである。

新聞各紙も「“暴行”のうわさ話 事実無根と結論 鈴鹿署」、「デマうち消す文書を回覧 鈴鹿署」などの見出しで報道した⁽²⁾。これによって、ようやく流言騒ぎは収束にむかった。

3. 流言の伝達者

市民によると外国人による暴行のうわさを、市民のほとんどが耳にしたという。調査結果によれば、聞いた人は67％であり、市民層に広汎に流言が流布していたことがわかる。注目すべきことは、特性の層に浸透していることだ。男女間で大きな格差が認められたが、なかでも「20歳代」女性が89％と極めて高く、「20歳代」男性の61％と対照的である（表1）。また女性の中でも、加齢とともに少なくなっていることから、若い女性を中心に流言が広まったと思われる。エドガール・モランの『オルレアンのうわさ』でも、女子高校生を中心にうわさが広まったことが指摘されている。

表1 そのうわさを聞いたことのある人の比率（問27）

	男性	女性	総数
総数	60.7	73.0	67.1
20歳代	60.7	88.9	78.1
30歳代	72.7	79.2	76.3
40歳代	75.6	80.6	78.8
50歳代	68.1	76.1	72.9
60歳代	42.3	59.3	50.5
70歳以上	44.1	32.0	37.5

うわさを聞いた人のうち58％のものは、また誰かに話をしている。発端が2～3人のおしゃべりから始まったとしても、うわさの連鎖によって、短期間で幾何級数的に拡大していったことは、このことから容易に予想できる。

うわさの伝播者は、どのような人なのだろうか。表2のように男性より女性が多い。女性では30歳代では88％に達している。これは20歳代の男性と比べると、47ポイントも多くなっている。また、女性の学歴階層別にみると、「大学・大学院」は比較的少なく（53％）、「短大・専門学校」が多い（75％）。

表2 年齢別、性別うわさを誰かに話した人の比率（問27-4）

	男性	女性	総数
総数	45.8	66.5	58.3
20歳代	41.2	77.5	66.7
30歳代	59.4	88.1	75.7
40歳代	47.1	66.7	59.6
50歳代	37.5	46.3	43.0
60歳代	45.5	59.4	53.7
70歳以上	37.5	62.5	45.8

さらに多くの人から聞いている人ほど、またそのうわさを誰かに話している（「1人」21%→「2～3人」44%→「6～9人」88%、Gamma-.533）。

うわさ話を聞いて「こわい」と思った人ほど、うわさの伝搬者になっている（表4、Gamma.830）。ここから容易に推測されるように、自らが被害者になる不安に駆られた人ほど、このうわさ話を、また誰かに話さずにはおれなくなる。とくに女性は、「こわい」と受けとめている（表5）。したがって、女性が、うわさの伝搬者になりやすい。その場合、流言の拡大に加担しているという加害性の認識は、すっぱりと抜け落ちてしまっているのだろう。

池上重弘が指摘するように「また外国人側との双方向的な情報流通回路を持たない日本人側が、外国人を犯人像とする根拠のない流言にとらわれることは、たとえそれを口にする個人が意識しなかったとしても、まじめに生活する多くの外国人を不利な立場—偏見や排斥—に追いやる結果になりかねない」⁽³⁾。

もちろん、悪意なく、伝え聞いたうわさ話を単純におしゃべりをするというだけではない、排除志向をもつ人もいる。「外国人は出ていってほしい」と思った人は、うわさの伝搬者になっている（表6）。このような排除の志向性をもつ人は、うわさを伝える場合にも、排除のメッセージを織り込んでいこう。それが、うわさに尾ひれ、背ひれをつけていくのかもしれない。

流言を聞いたとき、「デマにちがいない」と批判的に受けとめた人はわずかに23%にすぎない。

表3 うわさの受けとめ方（問27-3）

	総数	男性	女性
A. こわい	79.4%	72.5%	84.3%
B. 外国人労働者は出ていってほしい	38.0	39.2	37.4
C. 本当であってほしくない	78.6	70.6	84.3
D. デマにちがいない	22.5	25.5	21.3

表4 「こわい」という受けとめ方と、うわさの伝播（問27-3）

	話した	誰にも話さなかった	計
「こわい」と思った	198 (65.6)	104 (34.4)	302 (93.8)
そう思わなかった	3 (15.0)	17 (85.0)	20 (6.2)
計	201 (62.4)	121 (37.6)	322 (100.0)

表5 性別、「こわい」という受けとめ方（問27-3 A）

	そう思った	そう思わなかった	計
男性	111 (89.5)	13 (10.5)	124 (38.2)
女性	194 (96.5)	7 (3.5)	201 (61.8)
計	305 (93.8)	20 (6.2)	325 (100.0)

*「無回答」を除いて%を計算しているために表3とは異った数値になっている。

表6 「外国人は出ていってほしい」という受けとめ方と、うわさの伝播（問27-3）

	話した	誰にも話さなかった	計
「出ていってほしい」と思った	109 (75.7)	35 (24.3)	144 (49.8)
そう思わなかった	75 (51.7)	70 (48.3)	145 (50.2)
計	184 (63.7)	105 (36.3)	289 (100.0)

4. なぜ鈴鹿市で発生したのか

流言騒ぎは、鈴鹿市だけではない。外国人によって女性が暴行されるという流言は各地で発生している。池上重弘によると、翌年の1998年同じ三重県の上野市でも同様の流言が発生したという。また、池上重弘によると、流言騒ぎは静岡県浜松市でも発生しており、静岡県立短期大学の学生121人に調査した結果、24人が浜松市、焼津市など各地で外国人による暴行の流言を聞いたとしている⁽⁴⁾。また、三隅譲二によると、1990年から92年頃にかけて、東京都足立区、埼玉県、千葉県などの諸都市で類似の流言騒ぎが起こっている⁽⁵⁾。

流言が広まった背景について、三隅譲二は、外国人労働者の急激な増加と町工場と住宅の

混住地域という地域性を指摘している⁽⁶⁾。また、池上重弘は「新来外国人と日本人との間のコミュニケーション不全」と、「マスコミ報道によって作り上げられた新来外国人に関するイメージの影響」を指摘している⁽⁷⁾。この点には、異論はない。

鈴鹿市の流言にも同様な点が指摘できる。外国人労働者の急激な増加が1990年から始まり、ブラジル籍は1989年229人であったが、1997年には2,782人と10倍以上増加している。また、89年にはゼロであったペルー籍は、97年 526人へと急増している（表7）⁽⁸⁾。人口18万人の比較的小規模な鈴鹿市で、数年の間に、外国人は顕在化した存在になったのである。

表7 鈴鹿市の外国人登録人口

（各年、12月末現在）

国籍	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998
ブラジル	229	457	1,001	1,207	1,229	1,047	1,317	2,146	2,782	3,093
韓国または朝鮮	816	806	818	810	808	790	777	769	795	792
ペルー	0	30	133	178	228	266	322	459	526	628
中国	33	47	34	42	48	50	72	93	118	133
フィリピン	24	29	38	54	62	71	81	86	95	108
ボリビア	0	0	17	15	13	5	7	16	33	69
タイ	0	7	8	22	20	27	20	23	29	34
米国	17	24	28	60	84	72	34	34	20	17
その他	47	55	56	79	88	109	147	189	229	267
計	1,116	1,455	2,133	2,467	2,580	2,437	2,777	3,815	4,627	5,141

「コンビニであっても、声をかけられたら、どうしようと思って、遠ざかってしまう」と正直に語ってくれたのは市役所の若い職員である。このような漠然とした不安感をもつ市民も少なくない。よそものに対する警戒心というよりは、ポルトガル語がわからないという気弱さによるものである。

さらに鈴鹿市で流言が急激に広まった理由としてあげることができるのは、小都市であるためにface to faceによる情報伝播のネットワークが濃密になっていることである。平均して4.7人からうわさを聞いている。最も多いのは「40歳代」女性の5.41人（表8）である。

流言をいくつものチャンネルを通して聞いている。多様なチャンネルから聞けばきくほど、うわさ話の「真実」性が高まる。それによって流言が一気に拡がったと考えられる。また、ムラ型の濃密な人間関係の存在とともに、鈴鹿市は自動車産業の発展とともに、外府県からの転入人口を受け入れ、新旧住民の混住が進行し、匿名化された市民世界が出現している。それが流言の発生に拍車をかけたとみられる。

表 8 グループ別うわさの平均接触頻度（Q27-1）

	総数		男性		女性	
	平均人数	ケース数	平均人数	ケース数	平均人数	ケース数
総数	4.70	369	4.34	148	4.95	221
20歳代	5.13	56	5.18	17	5.12	39
30歳代	4.74	72	4.29	31	5.09	41
40歳代	5.13	88	4.71	34	5.41	53
50歳代	4.40	83	4.09	32	4.59	51
60歳代	4.27	51	3.95	20	4.48	31
70歳以上	3.88	20	3.68	14	4.33	6
義務教育	4.86	70	4.65	31	5.05	38
高等学校	4.65	167	4.32	71	4.89	96
短大、専門学校	5.08	71	7.00	6	4.90	65
大学、大学院	4.28	58	3.77	39	5.32	19
生まれてから	5.11	136	4.64	53	5.42	83
20年以上	4.22	140	4.07	61	4.33	79
10年～20年未満	5.19	54	3.56	17	5.93	37
5年～10年未満	4.44	25	4.70	10	4.25	14
5年未満	4.23	15	5.79	7	2.88	8
300万円未満	3.66	16	3.60	5	3.68	11
300万～500万円未満	4.34	77	4.09	37	4.56	40
500万～800万円未満	4.99	117	4.07	43	5.52	74
800万～1200万円未満	4.16	92	3.61	38	4.56	53
1200万円以上	5.99	39	6.55	19	5.45	20

5. 流言の内容分析

どのような話を聞いたのか、自由に書いてもらった。「うわさ」を具体的に記入したのは307人、有効回答572人の53.7%であり、この記入比率からみても、市民は強い関心をもっていたことがわかる。

その具体的事例を紹介する。（なおショッピングセンターの店名を匿名化するためにBC、もう一つをHUと表現しておく。4桁の数字は回答者の整理番号であり、特に意味はない）

0264 ショッピングセンターで小学3年生の子がトイレで襲われた。子宮破裂で入院して、子供が産めない体になった。精神病院に入院しているらしい。／ショッピングセンターの歩道で木陰から出てきた外国人5、6人に自転車をこかされて暴行された。ショックで自殺した。17歳の女の子なので家族がこのことは秘密にしているらしい。／散歩中の老夫婦がいて、前を婦人後を夫が歩いていると、近くから出てきた外国人に婦人が後ろから襲われた。年齢なんて関係ない、とても怖いことだ。(／は原文では改行されていたことを示す)

0472 SHの2Fのトイレへ親子(少女、小学校低学年)が入り、親が階段にて待っているが、子供が出るのが遅いのでトイレ内に入ったが、暴行された後だった。親が出て階段で待っているとき、外国人2名がトイレから出ていったのを見ている。

0547 BC(SH?)の一階のトイレに5、6人の外国人男性がいて子供がトイレに入ってきたところを襲って暴行した。救急車で運ばれた。子宮破裂したと後で聞きました。老夫婦が夜、散歩していたところ外国人男性が数人で老夫婦の夫を倒して婦人の方を暴行した。という内容でした。そのうわさを聞いてからショッピングセンターなど一人で子供だけはトイレには行かせないようにしました。子供も恐ろしがつて「お母ちゃん一緒に行つて」と言うようになりました。

0175 ショッピングセンターBCのボーリング場脇の女子トイレで小学生5年生の女の子がペルー人の男数人に暴行され、子宮に棒を突っ込まれ、子宮が破れた。その女の子の母親は自殺してしまつた。「SH」の弁天山公園を老夫婦が散歩中60代の奥さんが強姦され、ご主人は気が狂つてしまつた。

5-1 うわさの特徴…もっともらしさと話題性(新奇性)

ショッピングセンターBCという具体名をあげるものが多かった。周辺にはSHなど他に2つの大型店舗がある。それにもかかわらずBCが多く上げられたのは、K工場跡地に最近オープンしたばかりであること、広大な駐車場をもち周辺都市を含め最大規模のものであること、ボーリング場や多数の飲食店があり、レジャーセンター的な要素をもつことなど、話題性が高かつたためと思われる。

ショッピングセンターは、BCという店名でほとんどが一致しているとしても、暴行のあった場所はBCの店内のさまざまな場所があげられている。「パン屋付近のトイレ」、「Iホール(ショッピングセンター内)前のトイレで」、「ボーリング場のトイレで」、「屋上の駐車場…トイレの中」、「小学生の女の子がベビーベッドで」、「駐車場で死角にあたるところ」など、このように場所が分散しているのも、うわさの伝搬者がさまざまに脚色していったためだろう。老夫婦が暴行されたといううわさの場合も同様で、地理的にも離れている市内の数カ所に分散している。それぞれはジョギングに適していそうな場所があげられたのだろう。

なお、〈ショッピングセンターのうわさ話〉では、被害者は、幼児から、高校生までの広がりがある。「0231 幼児が深夜近く母親とはぐれ外国人に襲われ、母親はショックで亡くなった」、「0043 小学校低学年の女の子」、「0337 小学2年生の女子」、「0267 10歳ぐらいの女の子が」、「0286 小学5年生」、「0343 ショッピングセンターで6年生ぐらいの子供」、「0052 小6の女の子」、「0005 中学生の女の子」、「S高校女子高生」、「0264 17歳の女の子」など。

他方、事件が起こった時刻に言及するものがいても、月日を特定する人はいなかった。「夕暮れ時」とか「夜遅く」とか、時刻の脚色は容易にできて、月日を創作するほど、うわさの伝搬者も厚顔ではなかったのだろう。

5-2 被害のひどさの強調…残忍性と奇抜性

流言に、ひとの耳目を引きつける意外性がなければ、伝達されない、鈴鹿市の場合、残忍性の強調と、高齢という意外性である。

特に「子宮破裂」と表現したものが28例など、被害のひどさを強調するものが多い。被害者や被害者の母親がショックで自殺したというのは38例もある。

また「0099 親は自殺し、子供は気が変になった」、「0460 中学生は、トイレで襲われて記憶喪失になった」、「0222 その後小学生は病院で植物人間になった」、「0332 その母親が精神異常になり自殺未遂を起こした」、「0061 散歩中の老夫婦の件は、夫の方がうつ病になったと聞いた」、「0175 老夫婦が散歩中60代の奥さんが強姦され、ご主人は気が狂ってしまった」、「0102 おばあちゃんはショックで自殺、おじいちゃんはボケてしまった」、「0216 散歩中の老夫婦が暴行され、老夫婦は離婚された」など後日談がつけ加えられている。

流言を伝搬させた要因は、(a)「起こっても不思議ではない」と思わせる「もっともらしさ」、(b)話題になるような奇抜性（意外性）であり、鈴鹿市の場合は、残忍性と悲劇性が強調されている。(c)性的な関心を引き起こす内容であったことも、エドガール・モランの『オルレアンのうわさ』と共通している。

6. 外国人差別としての性格

6-1 加害者とみなされたグループの国籍・民族

「加害者」は「外国人」という表現が多く、国籍ないしは民族を特定しているものは、全体からみれば少数であった。（「外国人」158例、「外人」13例、「ブラジル人」3例、「ブラジル系の人」2例、「日系人」1例、「日系南米人」1例、「南米系」1例、「南米人」1例、

「中南米系」1例、「イラン人（系）」2例、「黒人」2例）。それでは、「加害者」は外国人一般であり、日系の労働者ではないと想定されていたかというそうではない。鈴鹿市の人々の間では、「外国人」といえば、アメリカ人や中国人でなく、最近急速に増加したブラジル人やペルー人が想起されている。

それにも関わらず、「外国人」という表現が用いられているのは、なぜか。その理由を仮説的に提示するところなる。「外国人」という宴曲語法は、自らもつ不安や敵意を隠蔽する技法ではないか。日系ブラジル人・ペルー人に対する潜在的な恐れや不安をもちつつ、それを隠蔽し、特定のナショナリティをもつ人を「自分は差別しているのではない」ことを示すために、名指しを避けたのではないか。

6-2 日常的に反復されていたうわさ…外国人に対する警戒心

「強姦のうわさ」だけではなく、それ以外にも様々なうわさが飛び交っている。「0094 市内ベルシティで外国人に中高生が恐喝されたと聞いた」、「0134 ショッピングセンターで大学生が外国人風の男に殴られお金を奪われた」、「0174 BC（鈴鹿市内のショッピングセンター）の駐車場は危ない。外国人に恐喝されるから気を付けた方がいいよというもの」、「0544 トイレに入った中高年女性に中南米系の数人が取り囲み金銭を奪った。キャッシュカードも奪われた」、「0465 実際に近所のコンビニにドロボーとして入った」、「0561 夜コンビニで車を盗まれてしまった」、「0563 ショッピングセンターで子供等が外人に金品をとられた」など。

0240 駅で人を待っていると数人の外国人が何か困った様子で近寄ってきて、車の窓を開けて話を聞こうとすると全員が乗り込んできてそのままどこかへ連れて行かれた。この種の話が多かったように思います。大体2、3人から数人で見張りがいたりして近寄って来るといううわさです。そして車の中でお金を取られた、いたずらされたという話。駅前が特に多く、駅での人との待ち合わせは危ないといった話でした。

これらのうわさが日常的に反復されて、「外国人」に対する不安が市民の間に静かに浸透していた。そのような枯れ草の中に、「常軌を逸した暴行」といううわさの火が投げ込まれ、一気に流言が燃え上がったのではないか。

6－3 「外国人労働者を不当に扱っている」という罪悪感

外国人労働者がなぜ、そのような暴行におよんだのか。つぎのものは、まるでみてきたかのような話しとして語られている。

0003 外国人（南米系）の日雇い労働者を斡旋業者が外国人労働者の日当をピンハネしたり労働条件が悪く、最終的に解雇されたことに腹を立て、斡旋業者の家族に暴行（娘レイプ等）を行い、まだ治まりがつかないので、ショッピングセンターの駐車場でたまたま遊びに来たS高校女子高生をレイプし、子宮破裂させた。後に、その女子高生は自殺した話があった。また、散歩中の老夫婦はまずおやじが4、5人の南米系外国人にボコボコにされて、老女をレイプした話があった。

賃金のピンハネ、劣悪な労働条件、不当な解雇など、外国人労働者が痛めつけられているということが、行為の背景として語られる。いかにも事情通の話しである。しかし、このような言説は、「うわさ話」の真実性を高めるために用いられ、結果的には外国人労働者への敵意を反感を増幅させるものとして機能する。

ひるがえって考えてみると、外国人労働者を「こわい」とする感情は、他方で普段日本人が「外国人労働者を不当に扱っている」という罪悪感から湧出しているのではないか。

7. 流言再発の可能性

7－1 一年後のうわさの受けとめ方

一年後、「今、振り返ってみて、この騒ぎをどのように受けとめるのかを聞いた。その結果、うわさの受けとめ方は、「今回は事実でなかったとしても、このようなことはいつ起きても不思議ではない」と考えているものは半数を越える。外国人労働者への不安は、払拭されていない。

さらに、「警察は否定したが、うわさはやはり事実だったと思う」と信じている人も14%と少なからずみられる。これは、若い女性に比較的多い（「20歳代女性」22%、「30歳代女性」21%、「40歳代女性」13%）。若い世代の女性がうわさの主な担い手であったために、今でも真実だとして受けとめているものが多いのだろう。

8. まとめ

うわさが「起こっても不思議ではない」と思わせる「もっともらしさ」をもち、同時に奇

抜性と意外性をもっていたために話題性を高めた。また、性的な不安を呼び起こす内容であったため、若い女性がうわさの伝播者になっていった。しかし、若い女性という限られた層にとどまらなかったのは、濃密な対面的ネットワークを残していた小都市空間であったからで、複数のチャンネルから聞くことによって真実性がまし、男性にも、高齢者層にも流言が拡大していった。

このように多数の人が流言の伝播者になった。そのため、外国人労働者排除の態度をもった人たちに流通したとは考えにくい。それだからこそ、流言の伝播者は、排除への動員されていること、すなわち差別への荷担していることを自覚しなかったのではないか。加害性の認識をすっぱりと抜け落とさせたのは、自らが被害者になる不安に駆られたためであった。あるいは、単に暇つぶしのうわさ話にうち興じて、面白半分に尾ひれ、背びれを付け加えていったのかもしれない。しかし、それが次に伝えられたときには、恐怖を呼び起こしていった。

事実無根の作り話だったと知らされても、「今回は事実でなかったとしても、このようなことはいつ起きても不思議ではない」と考えている人は多い。他方で、真実性を補強するために対抗的神話がつくりだされていった。そのために、「警察は否定したが、うわさはやはり事実だった」と信じ続けている人は少なからずいる。

狭い地域社会に急激に増えた「外国人労働者」を、近くで見ながら遠ざけている。そのような状況がつづくかぎり、そして、うわさ話を伝播することの加害者性に無自覚であるかぎり、かたちを変えた流言の再発可能性は高いといえよう。

〔注〕

- (1) 無作為抽出した20歳以上の市民対象、有効回答572人、回答率33%。調査時期は1998年11月。
- (2) 「毎日新聞」1997.12.23、「伊勢新聞」1997.12.23、「中日新聞」1997.12.23
- (3) 池上重弘、1999、「東海地方に『外国人暴行魔』出没？—流言の構造と受容の背景—」『日本文化研究』11:13-21。
- (4) 池上重弘、1999、前掲書、18頁
- (5) 三隅讓二、1993、「外国人レイプ虜の噂の深層」『社会学・入門（別冊宝島 176）』宝島社、213-218。
- (6) 三隅讓二、1993、前掲書
- (7) 池上重弘、1999、前掲書、18頁
- (8) 他方、韓国朝鮮籍はやや減少傾向にある。